

老人と海から若人と海へ

～ 安全性の向上と労働力の確保 ～

波崎大学 2 班

織田 洋平（日本大学）

林 小百合（日本大学）

沼尻 俊介（高崎経済大学）

木下 朋佳（神奈川大学）

十亀 亮介（神奈川大学）

国枝 周輔（神奈川大学）

吉野 賢太（日本大学）

1. はじめに

現在、波崎漁港では、課題として、資源、労働力、設備問題の3点を挙げている。その中でも特に労働力に関する課題は、波崎漁港に限らず今後の漁業のあり方について考える上で大きな問題となっている。今回は、このような観点も考慮し、波崎漁港における労働力について取り上げ研究をおこなう。

具体的な波崎漁港における労働力の現状として、漁業に従事する船員数をみると、昭和25年頃1500人から1600人であったのに対し、現在は320人から330人へと大きく減少している。また、船員の平均年齢も50歳前後と中高齢者の占める割合が高く、労働者の高齢化が進んでおり、後継者となるべき若い労働者が不足している現状がみられる。そこで、本研究では若い労働力を確保するための具体的な対策などを検討し、今後の波崎漁港の活性化を含め、若い労働力確保のための一助を得ることを目的とする。

2. 研究概要

漁業に対し持つイメージは個人により違うが、一般に若者は漁業という職業に対しあまりいいイメージは持っていないと思われる。また、今回、実際に漁船に乗船し漁業関係者の話を聞いた上でも改めて漁業が危険な仕事・職場であるということを感じた。このような、危険なイメージも漁業が敬遠されるマイナス要素のひとつであり、これらのことを含めいくつかのマイナスイメージが若者から敬遠され、労働力の減少につながっている理由ではないかと思われる。こうしたイメージをひとつひとつ取り払っていくことが若い労働力を確保する上で重要ではないだろうか。今回の研究では漁業の危険なイメ

ジを払拭するためには、漁業に携わる上での危険な要素をなくすほかないのではと考え、我々が現場で感じた危険と思われる点を挙げ、安全性を考慮した改善案を提案したいと思う。そこで、まず実際に感じた危険と思われる主な点を以下のようにいくつか挙げて検討してみると、

- ・ ローラーによる巻き込み事故
- ・ 足場（ゆれる、網の上）
- ・ 手すりが少ない
- ・ 海上での作業であるが故の危険性

これら、全てのものが、一歩間違えると生命を脅かすような危険性を含むものである。以上のような危険な状況を改善する事によって安全性を向上させ、漁業に携わる作業者にとってよりよい職場をつくり、現在よりも高い労働力の確保を目指し、若者をひきつけるような職場へなるように安全性を重視した改善案を提案したいと考える。

3. 改善方法

- ・ サイドローラー(写真1)の高さをあげる。

サイドローラーに腕を巻き込んでしまう事故をこの対策により防ぐと同時に、船上での作業時における海への転落事故も防ぐことができ



写真1. サイドローラー

る。

- ・ 安全装置（非常停止ボタンなど）を作業者の手の届く範囲に設置する。

写真2では、ローラーそれぞれに安全装置が設置されておらず、ローラー付近で作業している本人がローラーを止めることができるようになっていない。根本的に安全装置は作業者自身の手に届くところに無ければ安全装置としての意味を持たない。よって、これを作業者自身が危険を感じた瞬間に自分で停止できるような位置に改善する。



写真2 . ローラから離れた場所にある操作装置

- ・ 滑り止めをつける。

現在は海上というただでさえ不安定な足場にもかかわらず、鉄のはしごや木の足場などを使用してさらに不安定にしている。これは、転倒事故や落下事故等の大きな原因となっていると思われる。これを完全に滑らなくはならないまでも滑り止めをつけるなどして少しは改善する事が出来るはずである。



写真3 . 船内に設置されたはしご

救命道具を迅速に使用できるようにする。

どのような仕組みになっているかは判らないが、非常に取り出しにくく見えた。救命道具を使用するという事は緊急時であり、人間はパニックを起こす事が想定される。よって迅速に救助を行えるような状態しておく事が望ましい。



写真4 . 救命用具

4. 結論

今回提案した漁船の安全面から見た改善方法は、どこまで実現できるかわからない部分もある。しかし、こうした安全面の改善をおこない、安全に対する意識を向上させていくことで若い人にも受け入れやすい職場環境になるのではないだろうか。また、改善を行うだけでなく、改善案の成果を広く若い人たちに認知してもらうことも、労働力の確保に効果があるのではと考える。そこで、これらの改善点を広く認知させるための一つ的手段として改善案の成果をインターネットなどの各種媒体を利用し、公表することも効果があるのではないだろうか。これらの取り組みで漁業に対する『危険』というイメージを少しでも減らし、先入観にとらわれない「漁業」の本当の姿を知ってもらうことで就職の選択肢の一つに漁業を加えてもらえれば、若い労働力の獲得につながるのではないかと考える。